

TS転生エルフの 異世界性生活

～荒くれ者たちに全ての孔を
開発されて雌になる～



脳を激しく揺さぶるような眩暈のあと、突如として溢れ出したのは、満員電車で揺られ、上司の理不尽に耐え、ただ平穏を求めている冴えないアラサーサラリーマンとしての記憶だった。

（嘘だろ、死んだのか……？なんで…？いや、それよりここは…）

混乱しながらも、ふと足元に目を落とす。

そこには透き通った水を湛えた、美しい湖の岸辺だった。

吸い寄せられるように水面を覗き込んだ瞬間、思考は完全にフリーズした。

水面に映っていたのは、くたびれたスーツ姿の男ではない。

信じられないほど透き通った白い肌。

絹糸のようにサラサラと流れる、神秘的な金の髪。

そして、髪の間隙から覗く、特徴的な長い耳

「これ、エルフってやつ……！？ っていうか——」

自分の頬に両手を当て、水面に顔を限界まで近づけた。

パチパチと瞬きをするたびに、長い睫毛に縁取られたエメラルドグリーンの瞳が、潤んだようにキラキラと輝く。

驚きに開いた薄い唇は、桜の花びらのように淡く色づいていた。

「ボク、めっちゃ可愛いじゃんっ……！！」

前世の記憶があるせいで客観的に見てしまうが、

控えめに言って超絶美少女である。

嬉しくなって思わずその場でぴょんぴょんと跳ねてみると、細い身体に合わせて、

小ぶりの胸が、衣服の布地を押し上げるように「ぷるん」と健気に揺れた。

「すご、揺れた？揺れたよね？！ちょっと、小さいような気もするけど、柔らかい！……ひゃんっ！？」

おそろおそろ胸に手を当てて確かめてみると、ほっそりとした指がマシュマロのような柔らかな乳房に沈む。

前世の記憶にはない、脳を痺れさせるような甘い快感が背筋を駆け抜けた。

思わず変な声が出て、自らの口を手で押さえる。

ただ声を漏らしただけなのに、上目遣いになった自分の表情は、男の庇護欲を極限まで煽るような、破壊力を持っていた。

（いやいや、これ、この容姿でこの身体はヤバいでしょ……！ どんな服着ても似合っちゃうやつ）

湖を鏡代わりに、髪をかき上げてみたり、あざといポーズを取ってみる。そうっと短いスカートも捲ってみたり…、とドキドキしながら際どいところまでいったところで手は止まった。

なんせこの男、精神はピッカピカの童貞だからである。

——なんてはしゃいでいたのは、半年前のことだ。

ここは冒険者ギルド、泥にまみれた床、油で黒ずんだ机、そして飛び交う下品な怒号。

汚れきったその場所に、およそ似つかわしくない『神聖な美』が迷い込んできた。

「こんにちは！」と、鈴を転がすような声で愛想よくギルドの扉をくぐったのは、透き通るような肌と長い耳を持つ、世間知らずのエルフの美少女だ。

瞬間、酒場を支配していた喧噪が、水を打ったように静まり返る。

ギラついたハイエナのような視線が一斉に彼女の華奢な身体へと注がれ、あちこちのテーブルから、ゴクリと下品に唾を飲み込む音が漏れた。

すると、値踏みするような男たちの包囲網を割り、ひときわ体格のいい男が現れる。

この界限では新参殺しで有名な、筋骨隆々のベテラン冒険者だ。周囲には恐れられているが、『彼女』を見つけると毎度のようにニヤついて絡んでくる。

「おう、レティじゃねえか」

「あれえ？今日も奢ってくれるの？」

「おいおい、出会い頭に随分じゃねえか、まあ、あんたみたいな美人なら喜んで奢るぜ」

「やったあ♡」

大きなエメラルドグリーンの瞳をキラキラと輝かせながら、ガタイの良い冒険者の男たちと親しげに言葉を交わす。

彼女は通りすがりの者たちが思わず振り返ってしまう程の美貌を持っていた。

更にエルフは非常に希少な種族だ。

深い森に集落を作り、自然を愛しひっそりと暮らしている。プライドが高く排他的、人間などの他種族を見下す傾向があり、滅多に森の外に出ない。その中でも彼女の性格は異質中の異質であった。

なにせ彼女は、前世は日本のサラリーマンで重度のオタクだったのである。

陰キャではあったが、このファンタジー世界に転生し、美少女に生まれ変わったことで、前世で培ったオタク知識を

フル稼働して『男が喜ぶあざと可愛い理想の美少女』を完璧にプロデュースし、楽しんでいた。

そして日本より圧倒的に娯楽の少ない異世界、特にエルフの里は、日本に住んでいた彼、もとい、彼女にとっては非常に退屈だった。

意を決して里を飛び出し、他種族の住まう街へと繰り出すやいなや、非常に注目を浴びた。

街の門番、店の従業員、宿屋の女将、そして冒険者ギルドの受付。

生きるために避けて通れない彼らとの交流を、彼女は前世の『飛び込み営業』と割り切った。最初は内心バクバクだったものの、いざ始まれば身体が勝手に動く。

前世のブラック企業で骨の髄まで叩き込まれた『極上の愛想笑い』と『完璧なビジネスマナー』を、全力で発動したのだ。

「此処まで愛想のいいエルフは珍しい」と街では噂になり、誰からも愛される（と本人は思っている）新人冒険者となったのである。

里を飛び出してから季節は二つ過ぎており、今は初夏で、じつとりと肌に張り付くような湿り気のある気温である。

そんな中、冒険者ギルドに併設されている酒場で賑やかな声が湧き上がった。

「「「かんぱーい！」」」

「今日の稼ぎはどうだった？」

「ぼちぼちかなあ」

「ぼちぼち？」

「あっ、えーと、まあまあいい感じ！まあ、ボクの魔法にかかれば楽勝だよ」

（ぼちぼちは通じないかあ）

「流石だなあ。ランク上がるのも時間の問題なんじゃないか？」

「うん、近々上がるかも、あと…いち、にい、さん…何回？わかんないけど、その内？上がるかなあ？」

「なんだよそれ、適当だなあ」

酒場に男たちのガサツな笑い声がドッと響き渡る。

その下品な視線は、無防備なエルフの美少女へといやらしく注がれていた。

レティはエールをちびりと口に含み、ふふんと得意げに胸を張った。白くハリのある胸元が、薄着越しからぷるんと揺れる。

男たちのギラついた視線がそこに集中していることなど、世間知らずでポジティブな彼女は微塵も気づいていない。

（あ〜、やっぱり異世界の酒場で飲むエールは最高だなあ！前世の接待ゴルフに比べたら、こういう利害関係のないフランクな連中とバカ騒ぎする方が100倍楽しいし、ボクってば完全にこの世界の『愛され新人美少女冒険者』のポジション確立しちゃってるよね！むふふっ）

「いやあ、それにしてもレティちゃんはノリが良くて助かるぜ。エルフっていうのは、どいつもこいつもいけすかねえ奴らだと思っていたが、あんたみたいなやつもいるんだなあ」

「あはは、あいつらみんな、ちょっと真面目すぎるっていうか、ノリが固いんだよね！異世界の……あ、いや、里の文化はちょっと閉鎖的すぎるっていうか、もっと他種族交

流イベント（飲み会）とか積極的に参加すればいいのにね〜」

たどたどしい口調でノリ良く返すレティに、男たちは顔を見合わせ、その醜い口元を「ニヤリ」と歪ませた。

「そうだな。インキャ？っていうのはよくわからんが、じゃあ、他種族交流を深めるために、とっておきの高級酒を注文してやろうじゃねえか。おい、マスター！こいつに『夜咲き花の蜜酒』出してくれ！……あんたみたいに綺麗なエルフにぴったりの、フローラルな甘い酒だ」

「えっ、なにそれ、美味しそう！ やったあ、せんばい♡大好き♡」

レティは大きな宝石のような瞳をさらに輝かせた。

彼女が前世のオタク知識をいくら持っていても、ここは本物の『肥溜め』だ。

運ばれてきた琥珀色の甘い酒の底に、男たちが手慣れた動作で仕込んだ「怪しげな白い粉」が完全に溶け込んでいることなど、知る由もなかった。

「上等な酒は風味が命だ、一滴残さず飲み干してくれよ！」

「うん！ いただきまーす！」

ぐび、ぐび、と喉を鳴らして、無防備に甘い毒を飲み干していくエルフの美少女。

琥珀色の液体が彼女の薄い唇を濡らし、口端から一滴、伝った雫が白い首筋を滑り落ちていく。男たちはその官能的な光景を食い入るように見つめ、すでに頭の中では、その華奢な身体を組み敷き、短いスカートを乱暴に捲り上げた先の割れ目を貪る妄想に耽っていた。

じっとりと汗ばむ酒場の空気の中、男たちの呼吸がわずかに荒くなり、下品な期待感で空間が満ちていく。

「ぷはぁ！ あまくて美味し〜い！ なんだかフルーティーでジュースみたい！」

レティは空になったグラスを机に置き、満足げにふにやりと微笑んだ。

だが、異変はすぐにやってきた。

「……ん？ あれ……？」

数分と経たないうちに、じわじわと胃の奥から不自然な熱がせり上がってくる。

初夏の蒸し暑さとは明らかに違う、身体の内側から皮膚を焼き焦がすような、どろりとした熱さ。

（おかしいな……ボク、そんなにお酒弱くないはず、なのに……）

急激に心臓がドクドクと不快な脈を打ち始め、視界がぐにゃりと歪んだ。

白く透き通るようなエルフの肌が、瞬く間に耳の先まで真っ赤に染まっていく。

「ひゃあ……あ、熱い……なんだか、急に頭がふわふわして……」

「おうおう、どうしたレティちゃん？ 顔が真っ赤だぜ。お酒が回ったか？」

ニヤニヤと顔を見合わせる男たちの声が、水の中にいるように遠く頼りなく聞こえる。

「う、うん……ちょっと、急に眠く、なって……。少しだけ……横に、になりたい、なあ……」

呂律が回らなくなり、レティは自分の身体が鉛のように重くなるのを感じた。

抵抗する意志すら急速に融解し、どさ、と木製のテーブルに突っ伏してしまう。エメラルドグリーンの瞳が完全に閉じられた。

数分前まで無邪気に笑っていたレティは、突然電池が切れたように完全な虚脱状態に陥った。

「……おい、大丈夫か？」

「んう……ね……むい……うごけ、ない……」

「がんばって依頼をこなしたから疲れが出たんだな。俺たちが部屋まで運んでやるから、気にしないで寝てな」

「んう～……………ありあとお……………」

完全に泥酔（と彼女が思い込んでいる）した身体に、男の手が触れる。

介抱するフリをして、手のひらはレティの華奢な肩を撫で、背中を這い、そして脇腹へと、明らかにいやらしい手つきでねっとり移動していく。

しかし、レティはそれを不快に思う脳の機能すら麻痺し、そのまま深い意識の闇へと沈んでいった。

すうすうと無垢な寝息を立てはじめる、無防備に晒された小さな身体。

男はそれを、待ってましたとばかりに軽々と横抱きにする。

ギルド併設の酒場は、そのまま二階が『簡易宿舎』になっていた。

「おい、いつもの部屋空いてるな？」と男が酒場のマスターに声をかけると、マスターは深く詮索することもなく、無造作に使い古された真鍮の鍵をカウンターに置いた。

周囲の冒険者たちが「なんだ、今日もか」「相変わらず警戒心ゼロだなあ、お盛んだねえ」と下卑た笑いではやし立てるのを背中で聞きながら、男たちは足早に宿の階段を上がった。

ギィ、と建付けの悪い扉が閉まり、密室になった途端、男たちの間にあった空気の「色」が変わる。

「薬はバッチリ効いているようだな。これなら何しても起きねえよ」

そう言ってレティをベッドへ放り出したのは、酒場で彼女を抱きかかえていた筋骨隆々の男だ。その横では、早くもズボンのベルトに手をかけた大柄な男と、下品な薄笑いを

浮かべながら部屋の明かりを絞る小柄な男が、飢えた獣のような目を光らせている。

古びた、薄汚い宿屋のベッド。そこに、あまりにも不釣り合いに白く美しいレティの肢体が横たえられる。

バサリと粗末な毛布の上に放り出された彼女は、自分がどれほど危機的な状況にあるかも知らず、ただ心地よさそうに「んみゅ……」と小さく唇を震わせるだけだ。

寝返りを打った拍子に、華奢な肩口から衣服がずるりと滑り落ちた。

すうすうと穏やかな寝息を立てて小さく上下する胸元、そして、はだけたスカートの隙間から露わになった、柔らかそうな太もも。エルフ特有の、抜けるように白い肌が薄暗い部屋の中で妖しく浮かび上がっている。

「……今日もヤバいな」

大柄な男が、辛抱たまらんと言わんばかりにごくりと唾を飲み込んだ。

「クソ、我慢できねえ。もう始めていいだろ？」

明かりを絞り終えた小柄な男が、股間を大きく膨らませながら這い寄ってくる。

リーダー格の男を含めた三人の獣のような視線が、レティの無防備な身体へと突き刺さる。

三人分の生々しい荒い呼吸が、静かな室内に満ちていった。

これから自分たちの欲望で、この美しい少女の身体がドロドロに汚されるとも知らず、哀れなエルフは、ただ深く、心地よい眠りの底へと沈み込んでいた。

「さあて、失礼します」

呑気に眠りこける少女のスカートを、男たちのゲスな手が容赦なく捲り上げる。布の擦れる音が薄暗い密室に淡々と木霊し、薄い布地をがばりと大胆に剥ぎ取ると、そこには抜けるように白い至高の肢体が完全に曝け出された。

衣服の隙間から、白くハリのある乳房がぷるんと露わになる。決してグラマーとはいえないが、中央にちょこんとついた桃色の突起が愛らしく、女性特有の極上の柔らかさがあり、何よりも若々しい肌のハリがある。

白くほっそりとした太ももから、男の手によってパンティがするりと引き抜かれると、そこにはぴっちりとは閉じた神秘的な膣口が目に入った。

「おい、たまんねえな。じゃあ、まずは俺から味見させてもらうぜ……」

リーダー格の男が、レティの細い両足の首を掴んで、ぱかりと大きく左右に広げた。その瞬間、むっとした熱気に乗り、彼女の秘部から汗と、美少女特有の甘酸っぱい匂いがむわりと立ち上って男たちの鼻腔を強烈に擦る。

男は辛抱たまらんと言わんばかりに顔を埋め、肉厚の舌を割れ目に力任せに差し込み、貪るように舐めしゃぶった。

ぴちゃっ、ぴちゅっ、ちゅばっ、ちゅばっ、じゅるううう……ッ！

「ん、っ……ふ、う……」

「じゅるっ、じゅるっ、じゅるるうううう！ ぶはあっ、むれむれおまんこ、塩気が効いてて最高にうめえ！」

容赦ない舌のドリルが、クリトリスをジュルジュルと吸い上げる。レティの華奢な身体がピクッ、ピクン、と大きく震える。意識は睡眠薬の泥の中にあるというのに、エルフの超敏感な神経は、男の汚い舌の刺激に本能だけで淫らに反応していた。

さらに、レティの枕元に陣取った大柄な男が、ピンと立ち上がり始めている彼女の乳首に目をつけ、左右から大きな手でそれぞれを弄び始める。細い鎖骨の下にある柔らかな膨らみをガシッと掴み、肉を潰すように揉みしだきながら、先端の淡い蕾を親指の腹でくにゅんっ♡こりこりっ♡と執拗に擦り上げていく。

「あッっ、あっ…ん……あふう……」

指先でコリコリと硬い芯をいじめてやれば、レティの白い首はふると左右に揺れて、小さな唇からは、まるで鈴を転がしたような可愛らしい嬌声が漏れ出す。

男3人はその淫らな声を熱心に耳をそばだて、自らの欲棒を限界まで硬化させながら、彼女の無防備な挙動に釘付けになっていた。

「今日もレティちゃんの大好きなおちんぼ、沢山食わせてやるからなあ」

男の舌責めによって、レティの膣口からは、すでに本人の意志とは無関係に、透明な愛液がとろりと滲み出していた。男はボロンと赤黒く獰猛な欲棒を剥き出しにし、早速、蜜で濡れた膣口に挿入しようと、先走りの滴る凶悪な先端でぬちぬちと入り口をノックする。

膣口が、本能的な快感の記憶を求めるようにちゅう♡と男の亀頭に吸い付いてきた。男はもう限界だった。

ぐ、ぐちっ、ぐぽおおおおお！

「んああああっ♡」

「おおっ！…今日もキッツキツだなっ……フウっっ！」

グッ、ズブッ……！！

引き裂くような音を立てて、男のペニスがレティの狭いナカを拡げながら、一気に突き進む。

……………ずぶう…、っぐちゅんっ♡

「ん、ううっ、んう……、んふう、う…っ」

びくうっ、と少女の華奢な腰が、ベッドから浮き上がるほど綺麗にのけぞる。

どちゅうううッッ♡ ぐじゅんっっ♡ ぱちゅっ！ぱちゅっ！
ぱちゅんっっ♡

男が腰を激しく前後に抜き差しすると、その猛烈な衝動で、レティの控えめな乳房がぶるんっ、ぶるんっ小さく健気に揺れる。

「ふうっ！ レティちゃんはっ！ おまんこもっ！ 愛嬌満点だなあっ！」

ごっちゅごっちゅごっちゅごっちゅごっちゅごっちゅ！！

「あっ…っんッ、っあ、ん、あっ……、あ、あッ、んう…っ」

激しいピストンでシートが擦れる中、枕元にいた大柄な男が、下品な薄笑いを浮かべながら自身のベルトを外した。

「おい、下だけでそんなに良い声を出すんじゃないよ。口突っ込んだら起きるかね？」

足元で腰を振る男が息を荒くして答える。

「こいつっ、まんこにちんぽ入れても起きないから、大丈夫だろ、ふうっ！」

その横で、レティの乳首をコリコリと弄り続けていた男が「ふうん、じゃ、いっかあ、入れまーす」と、今度はレティの小さな顎をグイとこじ開け、自身のモノを滑り込ませた。

ぐぼおおおおっ♡♡♡

「おっほおっ、エルフの口ン中、あったけえ～」

「んぐ、ううーっ……、ンンう……」

がぼっっ、がっぽ、がっぽ、がっぽ、がっぽ！

「うおっ！ 喉の奥、きゅんきゅん締め付けやがるっ、くううっ」

「んぐっ、ううーっ、ンぶっ、んううーっ！」

「流石に目覚めんじゃねえか？」

「そんなときはそんな時だ。そのまま逆らえないようにめっちゃくちゃにして性奴隷にすりゃいいだろ」

「悪魔か、お前」

「お前に言われたかねえ」

上からは口をハメられ、下からはベッドがミシミシと悲鳴を上げるほどの猛烈なピストン。さらにその間、レティの左右の乳首をくにゅくにゅと執拗にいじめ抜く。

ごっちゅごっちゅ！ ごっちゅごっちゅ！ どちゅうううっ！
ぱっちゅ、ぱっちゅ、ぱっちゅ！

上下、そして胸から筋肉に挟み込まれた華奢な身体は、男たちの欲望のままにガタガタと激しく揺さぶられていた。